

ほし 彩星 だより 第95号



若年性認知症家族会・彩星の会会報

平成31年1月12日号

〒160-0022 新宿区新宿1-9-4 中公ビル御苑グリーンハイツ605

TEL 03-5919-4185/FAX 03-6380-5100

E-mail:hoshinokai@beach.ocn.ne.jp

巻頭言

「認知症基本法」の制定に向けて



南魚沼市立ゆきぐに大和病院事業管理者 全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会会長 宮永 和夫

明けましておめでとうございます。
皆様の日常・社会生活が平穏であることを祈念しております。

さて、今年はすでに皆様も耳にされたかと思いますが、公明党と自民党が議員立法の形で、認知症施策の推進を目指した法律を提案するようです。

この法律について、認知症関係の一部の団体は、対象を本人のみと主張しておりますが、私は認知症の特性からして、本人と家族は一体として考えるべきと思っていますので、その主張を変更して頂けるよう働きかけていきたいと思っています。また、就労についても、若年認知症の就労に限られているような記載ですが、今の時代は70歳を過ぎてでも働けますので、敢えて65歳で制限する必要はないと思っています。

前頭側頭葉変性症が難病に指定された際も、発症時が65歳以前でないと適応しないなど、杓子定規なことになっています。就労は、いずれの年齢でも希望者には門戸を開くべきと思っていますので、これも訂正を求めてゆきたいと思っています。

日本は認知症の罹患者数が今後も増加してゆくとされていますが、年齢別の発症率が増えているのではなく、平均寿命が延びて高齢者が多くなったことが第一の原因だと思います。しかし、欧州では認知症の罹患者数自体が減少したとの報告もあります。その点を考えると、認知症も対応可能となり、皆で取り組めば減少するかもしれません。そのような意味も含め、この法律には国と関係者のそれぞれの努力義務（減少に向かうような努力をするという）も含めて頂きたいと思っています。

ところで、認知症を減少させるには、早期診断と早期対応は必要なことですが、予防が大切だと言われています。

TVでは連日のように、認知症予防のための食事や運動、脳トレなどの番組が見られます。どの項目は効果がないなどと否定する気はありませんが、もっとも有効なのは生活習慣病対策です。第一は生活習慣病にならないこと。第二はなっても正常の値になるように努力することです。

生活習慣病は、日常生活と食習慣で対応できることです。また、認知症になった場合も生活習慣病への対応は進行を遅らせることができるようです。すなわち、認知症になる前も、なってからも、生活習慣病にならないよう心がけることが、もっとも認知症を少なくすることになると思います。是非身近なことから実践頂きたいと思っています。

「家族会」の活動は、本人と家族のQOL（生命及び生活の質）とQOD（人生の最後の質）の改善のための手段として、最良のものと思われませんが、もう一つ、会の中に向かうだけでなく、会の外に向かう動きも必要と思います。それは新オレンジプランにも見られる、QOC（コミュニティー・地域社会の質）の改善への働きかけです。

この「認知症基本法」への意見表明も、QOCの改善の一つの流れです。是非、関心を持って、経過を見守って頂きたいと思っています。





今年も、みなさまのご協力をいただきながら、彩星の会の発展に微力ながらも努める所存です。
どうぞよろしくお願い申し上げます。



彩星の会代表 森 義弘

会の代表として昨年はたいへんうれしいことが三つございました。

まず一つは「会費の納入率」が94%以上になったことです。この驚異的な数字は、なによりもありがたいことと思っております。

次に、寄付金に関する数字です。ご寄付いただいた金額の多少ではなく、「ご寄付をいただいた心の数」が昨年より20%以上も増えて、80名近くのみなさまから暖かいお心をいただいたことにとっても感謝しております。

さらには、前代表の小澤さんの「暖かい家族会」をしつかりと受け継いだのではないかと思えることです。

定例会などでお会いした時のみなさまからの言葉がとても心に沁みました。

この二つの数字と一つの言葉を励みに、今年も代表を務めさせていただきます。

一方、ご本人への対応も時代とともに変化ができております。認知症薬投与の減薬や休薬を含め、ケアの重要性が年々語られることが増えてまいりました。

これまでの認知症の人への対応策は、

- ・1970年代→治療というより隔離、80年代→病院から介護施設。
- ・1990年代→普通に暮らせる環境が整備。
- ・2000年代→介護保険制度で家庭的雰囲気施設の在宅支援。
- ・2010年代→財政抑制で施設から在宅へのシフトとなりつつあること。

これらから読み取れることは、在宅介護者へのこころのケアの重要性と、高齢化が進み認知症の人がたくさんいる社会に早いスピードで移行するということです。

そしてこれからは認知症の人や家族が特別な存在ではなく、社会の側が変わらなければいけない時代に入ります。

たとえば、多種の「紙おむつ」がどこの公衆トイレでも販売機に設置されているという状況。こうした光景が普通であるようにしなければいけないと思います。

末筆になりますが、会員みなさまのご健康とご多幸をお祈りして年頭のご挨拶といたします。

〈引用文献 徳田雄人氏 「認知症フレンドリー社会」〉



今回は若年性認知症ご本人の登壇となった。会場に集まったのは約70名、いつもよりかなり盛況だった。登壇されたのは東京在住のHさん。



◆以下事前打ち合わせに立ち会った三橋さんの話◆

始まる前の打ち合わせの時、Hさんから僕にビデオカメラが渡された。そして、

「今日の対談をカメラに撮って下さい」「今日をきっかけにこれからはビデオに収めます」「今ならまだ、みなさんの前で自分の考えを話せます」「これからどうなるかわかりませんが、これを撮っておくことによって、同じ病気で悩む人のために少しでも役立てられればと思います」とおっしゃった。

Hさんは初めに、「皆さん、今日のことは是非覚えておいて下さい。そして、これからはずっと見ていて下さい」と話され、司会の森代表との対談が始まった。

森：奥様に対する愛情の大きさは？

Hさん：若い頃、妻に持病があったので自分が助けると言って結婚を申し込んだのだが、今では妻におんぶに抱っこなので時々いつくことはある。妻に対する愛情は、広さで言えば自分の住んでいる区の総面積くらいでは。

森：普段はどんなふうに過ごしている？

Hさん：毎朝家族の洗濯物を干し、そのあと全部の部屋の掃除をする。二日に一度は風呂の掃除もする。午後は買い物。買うものは妻がペーパーに書いてくれている。牛乳は重いので最後に買うようにしているが、毎回のように帰宅して牛乳を買い忘れていたことに

気がつく。最初の頃は「なんでできないのか」といら
いらすることもあった。

森：趣味は何かある？何か運動しているとか。

Hさん：午前中の家事が終ると、自分が解放される時
間がある。これまでの仕事がかなりハードだったので、
体だけは鍛えておきたいと思い、一日一時間以上は歩
くようにしている。

森：奥様と一緒に過ごしていて「これは幸せだな」と
思えるときはどんなとき？

Hさん：幸せはいつも感じているが、妻との幸せな会
話は成立しない。議論することはイヤではないが納得
のいく会話は得られない。

森：行政に望むことは？

今日は新宿区区議小野裕次郎氏が来ているので、なに
かあれば言って欲しい。

Hさん：若年性認知症になってしまった人がすぐサポ
ートを受けられる体制を事前に組み立てていただき、
その後も生活しやすくなる仕組みを構築してもらい
たい。



<新宿区議小野裕次郎氏>

小野議員：東京23区で
も病気になったときにす
ぐに対応できる区は少な
いのが現状。もっとい
うなら若年性認知症のこ
とをきちんと認識してい
る部署や職員が少ない。隣
の豊島区では、若年性認
知症の埋もれている人が
どの程度いるのか把握す
ることになった。新宿区

も見習って若年性認知症で困っている人がどのくら
いいるのか、それに対する支援の体制を積み上げてい
くしかない。ワンストップですぐに対応ができる体制
は、どんな病気の場合でも必要なこと。若年性認知症
についてもきめ細かい対応ができるように、今後私も
議会に訴えていきたい。早めの気づきのためには、4
0歳以上の場合成人病チェックに加えて若年性認知
症チェックを加えても良いのではないか。このことも
提案していきたい。

Hさん：チェックの方法としては100から7を引く
方法でもよいのではないか。

小野議員：順天堂新井先生の講演を聞いたが、聞いて
初めて知ったこともある。若年性認知症のことをもっ
と広く知ってもらう機会を作る必要がある。役所でも
健康フェアなどでチェックブースを作る方法もある。
そこで100から7を引いてもらう。知人同士でやっ
てもよい。

森：本人として言って欲しくない言葉があれば？

Hさん：妻から「昨日言ったことと違うじゃない」と
言われたことはきつかった。言ったことを忘れてしま
っている。



<質疑応答>

Q1:

今休職中と聞いている。まだ力がかかり残っている
と思うが、休職に至った経緯は？障害者枠は使って
もらえなかったのか？

Hさんの奥様：

東京の大学病院に精密検査で2週間入院後、アルツ
ハイマーと診断を受けた。当時は勤務で地方にいた為、
勧められて3ヶ月病気休暇を取った。その後の説明で
は”高度な判断力を必要とする仕事なので障害者枠
には移せないが、一筆書けば給料は下がるが事務職に
移る方法はある”とのこと。休職を続けるのとどちら
が良いのか判断材料を求めたが、現在のところ貰えて
いない。現在は給与がなく傷病手当金でやりくりして
いるが、それも来年9月にはなくなる。

又、職場から、病気休暇や病気休職制度の内容を事
前に知らせてもらえなかった為、有給休暇を消化でき
なかったり、無駄な時間や費用がかかってしまう等、
サポート体制が整っていないので悔しい思いがある。

Q2:

認知症と思ったきっかけ、病院にかかったきっかけ
は？

Hさん：

現場が長かった。級を上げるために事務の仕事を始め
たが、そのときエラーが多いと感じた。それを隠した
記憶がある。たまたま地方への転勤の打診があった
ときに、小さな事務所なら何とかかなると思って転勤し
たが、そこでもやはりできなくなっていた。上司から
次第に自分の仕事を取り上げられていった。上司の母
の症状が自分に似ているからとのことで、部長が現地
の病院を探してくれそこで診てもらったところ、認知
症の可能性があるとされ東京の大学病院で診てもら
うほうが良いと言われた。

Q3:

そのとき奥様は？

奥様：

その1年前におかしいことに気がつき、近所の病院

に行ったことがあるが、その時は異常なしと言われた。その後、その病院からは誤診についてお詫びがあった。東京の大学病院ではっきり診断を受けた時は「やはりそうだったか」という気持ちとともに、今後の生活について不安が大きくなっていき、今でも変わらず不安は続いている。

Q4:

初診のショックとその後考え方が変わったきっかけは？

Hさん:

自分がどうなっているのか分からない感覚。よい感覚はなにも残っていない。東京の病院で精密検査を受け、画像を見ながら説明をされて納得できた。「助けてくれる人(医師)が見つかった。生きていける。」と安堵感を覚えた。そして残った脳みそで何かできないか考えた

～♪♪♪

ここで「どんぐりころころ」と「水戸黄門」のメロディーと歌詞を入れ替えた歌がHさんからアカペラで披露され、会場は感嘆の声と爆笑に包まれ一気に明るくなった。♪♪～

Q5:

奥様のご苦労を聞きたい

奥様:

どうしても効率を考えて行動するので、夫のことを待てずに先回りしてしまい夫から怒られることが多々ある。たまには実家に帰ってもらい一緒にいない時間を作るようにしている。

Q6:

どのようなサービスがあれば嬉しいと思いますか？

奥様:

現在要介護1で、目黒の「いきいき学大」を利用する時に介護保険を使用しているが、若年性認知症対応のデイが東京に2箇所(目黒、日野)しかないので、都内各区に1箇所は設けてもらいたい。

ケアマネージャー:

区の障害者窓口からは「介護保険を優先して利用して欲しい」と言われたが、介護保険では「いきいき学大」しか利用するものがない。Hさんにはその施設で効果があるのか模索しているところ。Hさんの活動を見て区も支援に動き出そうという機運が出てきている。

(文責:羽鳥)



今回の本人交流会は、講演会のお話が済んでからの参加でしたので、時間にして短く、自己紹介の後お手玉を使った歌遊びと指ゲームをしたりしました。ボランティアさん達も交えてのゲームは意外と難しく、頭が混乱しましたが年のせいと笑いでごまかしました。(B)



定例会終了後、若松河田駅近くの韓国料理屋「味韓」さんに32名が集合。直前まで人数が確定しないのがこの会の悩み。いつもお店に無理をいってわがままを聞いてもらっています。お店に感謝!

皆さん思いおもいに食べ、飲み、話し、笑い、お腹がきつくなるまで賑やかな時間を過ごしました。3次会カラオケは新宿へ移動。13人が残り、熱唱しました。(B)

賛助会員さんご紹介④

私は、大学病院に16年間勤めました。同居していた義母の認知症がひどくなり、昼間の勤務を希望して外来勤務に変わりました。外来での勤務で、難病で受診している患者さんとそのご家族に関わることになり、その経験が訪問看護に従事するきっかけになりました。

在宅では、認知症のお年寄りの方が、時として興奮されたケースが多々あり、そんな時には家族では興奮が収まらず、私がお本人とお話ししていると興奮が収まること多く見られました。又介護者の困りごとをお聞きし、対応策などを一緒に考えていくと、介護者の方も落ち着いてくることが見受けられました。

定年退職後、認知症だった義母の看護、在宅で訪問看護を利用して下さった多くの方の看護経験を、介護者の為に活かせたらと思い、何かお役に立てるボランティアがないかと思っていたところ、知人から羽鳥さんを紹介していただき、昨年1月彩星の会に入会致しました。宜しくお願い致します。

石井 敏子



『発病から現在までを振り返って』

山口県在住 A.S.

夫：64歳。2015年1月、アルツハイマー型認知症との診断を受ける。

夫が、若年性のアルツハイマー病と診断されたのは、3年8カ月前、60歳の時です。外科クリニックを新規開業して3年もたたない頃でした。開業準備に入るところから、物忘れの症状がはじまりました。

本人は年齢のせいだから大丈夫と言っていました。私としては不安を抱えながらの開業スタートでした。開業後は、しばらくは順調でしたが、次第にスタッフからの苦情が寄せられるようになりました。

物忘れだけでなく、電子カルテの操作方法や薬の処方までスタッフの助けが必要となるなど、いろいろな問題が次々と起こり、毎日ヒヤヒヤしながら見守っているような状態でした。認知症ではないかという私の漠然とした不安は、次第に確信へと変わっていきましたが、病院へ行って検査を受けるまでには少し時間がかかりました。病名を知ることが、本人にとっても家族にとってもよいことなのか、診断を下されたという事実が、どれほどのものを本人と私たち家族にもたらすのか。まだ結婚していない二人の子供は結婚できるのか。いろいろなことが頭の中をぐるぐると駆け巡りました。

躊躇しましたが、少しでも早くお薬を飲み始めて進行を遅らせることができるならと、検査を受けることにしました。結果はアルツハイマー型の認知症ということでした。幸いなことにクリニックの後を引き継いでやってくださる先生が見つかり、三人の子供たちもすでに家を出て独立していましたので、すべてをお譲りして仕事は引退することを私は決心しました。

夫は自分ではまだまだできると思っていたようで納得できないようでしたが、医療ミスでも起こしてしまったら大変なことになります。つらいけれども引退することが夫にとっても最善の道と思い、心を鬼にして引き継ぎの話を進めました。

周囲には認知症だと言うことは一切口にせず、粛々と整理しました。夫はおそらく断腸の思いだったと思います。悔し涙を浮かべることもありました。思い出すと胸が締め付けられます。「3年で閉じるのは初めて見た」と何度も言われました。「お坊ちゃん育ちだから、頑張ることができない」とも言われました。夫は頑張れない人ではないのに、そう思われるくらいなら、認知症のことを話したほうがいいのではないかと

も思いましたが、夫の気持ちを考えるとやはり口にはできませんでした。すべての閉院の処理が終わると切なくなり、涙が出ました。

閉院後3年たちました。振り返ってみると、私の心の中は随分と変わりました。むしろ明るくなりました。認知症に限らず、病気やその他の事情をかかえて苦労している人もたくさんいるはず。生きていればいろいろあって当たり前、皆それぞれの事情を抱えて頑張っているのです。私たち夫婦が、家族が特別なのではない、こんな当たり前のことに今さらながら気づきました。

今年の1月に娘が結婚式を挙げました。夫が娘とパーズンロードを歩くことができるのか心配で、お兄ちゃんか親戚のおじさんにでも頼もうかという私に、「父さんが出席しているのに一緒に歩かないなんて。友達の結婚式でもお父さんは皆オタオタしているから、少々大丈夫、大丈夫」と言う娘。娘にちょっぴりリードされながら、にこにこしながら立派に歩きました。

思えば子供3人とも父親の病気のことを自然に受け入れているようです。今までと変わりなく、普通に接していますし、病気を隠すという発想も全くないようです。

娘が結婚する時もお相手の親御さんは全く気にしませんので大丈夫ですと言ってくださいました。もしかして私一人で空回りしてた？

最近になって町内の方たちにもお話ししました。町内会長さんも「困ったことがあったら言ってください。そのために町内会があるのでですから」と言ってくださいました。こうして私の気持ちも少しずつ柔らかくなってきました。

引退してから、時々二人で小旅行をしましたが、最近、夫は外泊が苦手になってきました。でも夫が大好きな近くの川で川沿いの遊歩道もありますし、調べてみたら、なんと四国の秘境や鹿児島までも、新幹線を使えば日帰りで充分。この秋もまだまだ楽しめそうです。思えば結婚してから仕事一筋だった夫とのこの時間は神様からのプレゼントかもしれません。

今は夫の気持ちを尊重して、デイサービスなどのお世話にはなっていませんが、やがてこの二人だけの生活にも限界がくるでしょう。その時はその時。病気になってからもいつも穏やかで優しい夫と、明日のことを思い患うことなく、彩星の会からも力をもらい、一日一日を大切に過ごしていこうと思っています。



人今人

『「じいじ」と「おかあちゃん」』

佐藤 和香子

朝、なかなか自分で起きない主人を起こし、洗濯物干しを手伝ってもらう。今日はどんな一日が待っているのだろう。

「前頭側頭葉変性症」と病名が付くまでのわたしたち家族は困惑していた。

どうして?なぜ?という言葉ばかりがぐるぐると頭を廻る。

日暮れ時になると、何とも言えない焦燥感に押し潰されそうになる。

だが、当の本人は「飄々」としている。

二カ月に一度の「彩星の会」若年性認知症の家族会に参加させていただくと、若年性認知症と言ってもその方、その方で症状も違いますし、ご本人が病気を自分で理解しようと努力されているお話を伺うと、我が家の主人はどうだろうと、つい主人とは違うのに比較してしまう私がいる。

私は夫の事を「じいじ」と呼んでいる。そのじいじは私の事を「おかあちゃん」と呼んでくれる。心のなかでは「あなたのおかあちゃんじゃないよ!」と叫びたい日もある。

朝起きてからの衣食住すべてが、おかあちゃん頼りである。唯一、じいじが自ら動くことが、「歩く」ことである。

「歩きに行ってきます!」の合図とともにリュックを背負い、出かける前に“鬼子母神様”の土鈴を鳴らし外へ。じいじのルーティングである。

時に、40,000歩を超える脅威の脚力に、私のほうがお手上げになる。じいじの頭の中を覗いてみたい。大きなおおきな万歩計がありそうだ。

家族の事は記憶がメチャクチャ。私の名前、息子たち三人の名前もとにかく覚えていない。時々聞いてみるが、ストレスになるに違いないと思いあきらめている。

不思議な事は、自分の散歩?して来た道順は覚えていないが、どんなに辺りが暗くなろうと、じいじはおかあちゃんの待つ我が家に帰ってくる。まさに奇跡のようなご帰還である。

この先、おかあちゃんの名前も存在も、じいじの記憶の中から消えていくかも知れない。その日がいつかは、神のみぞ知る。

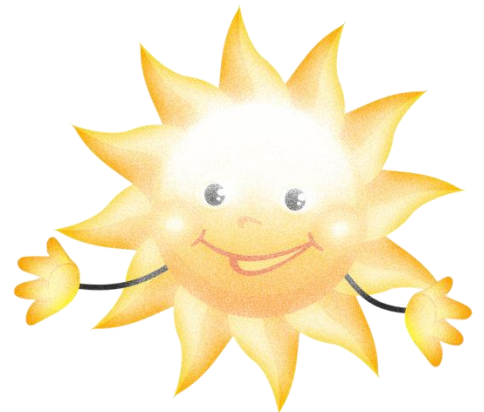
しかし、「美味しいね」と言って食事がとれて、「楽しいね」とたまに一緒に歩く学生街の喫茶店。

ほんの少しのじいじとおかあちゃんの交差点が、すぐに遠ざからないで欲しい。

あっ、今、じいじのご帰還!

「おかえり!」と声をかけると「おかえり!」の声。

確かに、「じいじ」は「おかあちゃん」の元に帰って来た。





「文京区若年性認知症家族の会 「シエルブルー」」

●準備会のはじまり

2017年7月。“提供できるお部屋があるが、文京区で何かお役に立てる活動はできないか”という文京区民の方ではないが、いずれ文京区での生活を考えていらした素敵な女性からの素敵なお申し出からこの会は始まりました。こうした“声”をきっかけに、行動力ピカイチな社会福祉協議会の元気ハツラツな若手職員の皆さん、文京区高齢者の方の安心安全な生活を支える冷静沈着な高齢者あんしん相談センターのベテラン職員の皆さん、地域のニーズを的確に捉え認知症のご本人の生活を真摯に支えるやり手の小規模多機能型居宅介護事業所のエース職員、文京区役所高齢福祉課職員の有志が集まりました。

以前、区内在住の若年性認知症の方より「文京区には当事者の会がないから他区の会に参加している」というお話を聞いたこともあり、いろいろと議論を重ねながら、「若年性認知症の会」の立ち上げに至りました。

●若年性認知症準備会から『シエルブルー』となるまで

会を実施する場所と有志の社会福祉士、介護福祉士、看護師（認知症支援コーディネーター）、保健師等の専門職は確保できました。しかし、若年性認知症のご本人やそのご家族にこの会のことを直接周知することの難しさや、もし専門的なご相談があっても相談応需のスキルが充分ではないこと、1人暮らしの認知症ご本人からこの会への参加希望があっても送迎支援が確保されていないこと等の課題が浮上しました。ただこうした課題があることを理由にして、この会の準備が滞ることは本意ではありませんでしたので、なんとか踏ん張ってみました。

そうした中で、若年性認知症のご本人もこの準備会に参加して下さる成り行きとなり、診断を受けた直後の気持ちや、診断後どのようにして地域のサービスや支援者につながる事ができたか、今の生活や今後の生活についてどのように考えていらっしゃるかを直接お伺いすることができました。この聡明な素敵な方が今の『シエルブルー』の代表を引き受けて下さった方です。

ゼロからのこの『シエルブルー』の立ち上げですから、壮大なビジョンも、どのようにすすめていけるとよいのかという運営方法も、切実な相談があったときの相談応需のスキルもすべてが未熟な状態です。

であれば、ご本人も支援者も、支援者ではないけれど認知症に興味を持って下さる皆さんと同じ目線でまずは勉強会をやってみよう！ということになりました。認知症になった時に知っておくとよい社会資源や、認知症ってそもそもどんな病気？これから私はどうなるの？という、認知症のご本人のご意見を参考にしながら企画しました。

その勉強会がきっかけで、彩星の会代表の森義弘さんともつながることができました。森さんは、なかなか認知症のご本人やそのご家族が集まらないという私達の悩みに対して「ゆっくりしっかりシエルブルーが成長していけるように一緒に頑張りましょう！」と底抜けに明るい力強い大きな声で励ましてくださいます。

この「LOVE 注入(森さん談)」のおかげで私達も焦らずに私達のペースを大切にしながらこの会に携わることができているように感じます。

そして2018年4月。「私は青い空が好きだわ～」という、これもある認知症のご本人のつぶやきから、何語がいいかしら？と議論を重ね、フランス語で“青い空”を意味する『シエル・ブルー』に会の名前が決定いたしました。みなさんにお知らせするための目の覚めるような空色が印象的なチラシもでき、今は関係各所に周知のご協力をいただきまして、近隣の医療機関や事業所の皆さんに配架をお願いしております。

そのチラシがきっかけとなり、他区にお住まいの家族介護者の方が参加していただきました。地域で別の認知症カフェを立ち上げて活躍されている方も、関係機関にお勤めの方も、家族介護者として参加して下さり、別の参加者のご相談に積極的に耳を傾け、的確な助言をしてくださいました。

まだまだ未熟な文京区若年性認知症の会『シエル・ブルー』ではありますが、皆さんとの出会いやつながりを大切にしながら、骨太な会に成長できるよう皆さんと一緒に作り上げていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



文京区若年性認知症の会

シエル・ブルー

対象

若年性認知症と診断された方、
そのご家族・関係者の方
※診断はされていない方で、ご心配な方などもぜひご参加ください。

場所

光源寺(駒込大観音)
文京区向丘2-38-22

今年度の開催スケジュール

毎月第3日曜日
13:00~15:00

8/19・9/16・10/21・11/18・12/16
H31.1/20・2/17・3/17

お問い合わせ
文京区若年性認知症の会 準備会
(文京区社会福祉協議会 地域福祉推進係)

TEL 03-5800-2942 (平日:9:00~17:00)
Fax 03-5800-2966
chiiki@bunsyakyo.or.jp



※当日は、医療・福祉の専門職がおりますので、ご安心ください。
※入退会は自由です。

参加費:100円
(お茶菓子付き)





■ 1月定例会

日時：1月27日（日）13：00～15：30（12：30 受付開始）
 会場：「新宿区立障害者福祉センター」新宿区戸山1-22-2
 家族交流会：「ミニ講演会」



講師：高橋正彦先生（クリニック医庵たまプラーザ院長）

「現場の医師から見た最近の若年性認知症の傾向と家族へのアドバイスについて」（仮題）

本人交流会：「今年もあまーい幸せから」～平成最後のお汁粉会～

♪ 歌声喫茶、お正月遊び♡♡



■「彩星だより」の受け取りを郵送からメールでの受取りに変更しませんか？

全面カラー版で、しかも数日早く見られます。お申込み方法→彩星の会メールアドレス

hoshinokai@beach.ocn.ne.jp に「彩星だよりメール受信希望」とお書きの上お名前も忘れずに送信してください。

■ご報告 下記の方々からご寄付をいただきました。（10月～11月）

岡田和美様、柿崎みゆき様、菊池友里江様、平山裕子様、藤沼三郎様、湯川文子様、
 米沢久子様、山花洋様、速水達也様、勝美津雄様、中桐幸子様、加藤弥生様、太田礼子様、
 千葉京子様、新里和弘様、和田敏子様、匿名様

寄附金合計額 456,120 円（2018年1月～11月） 厚く御礼申し上げます。（彩星の会事務局）

■日頃のお悩み事を募集します

経験者・専門家が、日頃のお悩み事に対する解決案を、会報の紙面上でお答えします。

f a xあるいはメールで事務局までお送りください。（匿名、ペンネーム可）

* お名前と連絡先は記載してください。

FAX：03-6380-5100 メール：hoshinokai@beach.ocn.ne.jp

■ご相談・ご入会は 彩星の会事務局 までご連絡ください

【相談日】月、水、金 10時30分～16時

電話：03-5919-4185 FAX：03-6380-5100

携帯電話：080-5005-5298（相談室：干場）

e-mail：hoshinokai@beach.ocn.ne.jp HP：<http://www.hoshinokai.org>

■年会費 家族会員 5,000 円 賛助会員 A 5,000 円/B 3,000 円/C 10,000 円

■お申込み（ご入金）は下記振替口座宛てにメッセージを添えてお願いします。

郵便振替口座番号：00170-7-463332 加入者名：若年性認知症家族会・彩星の会



編集後記 普段仕事と家の往復ばかりの生活をしているので、大雄山に行って来ました。駐車場から少し上って参道に出る。凜とした空気、スツと高く伸びた杉の木、パワースポットと聞いていたのですっかりその気になって、坐禅も約1時間体験。池に紅葉が散っていた。青い空と沈んだ池の底にも紅葉があり、心に残る風景でした。

（かやの木）